

平成21年（行コ）第261号

公金支出差止等請求控訴住民訴訟事件

控訴人 齋田友雄外17名

被控訴人 群馬県知事外1名

## 証拠申出書（治水その3）

2013（平成25）年5月21日

東京高等裁判所 第11民事部 御中

控訴人ら訴訟代理人弁護士 野 上 恭 道 代

同 嶋 田 久 夫 代

同 福 田 寿 男

ほか50名

## 第1 証人の表示

〒113-8656

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院 工学系研究科

証人 小 池 俊 雄（呼出 主尋問2時間）

## 第2 立証事項

- 1 日本学術会議は、平成23年1月、国交省河川局長から利根川水系の基本高水の検証の依頼を受けた。同学術会議は、以来、これに対する検討作業を行い、同年9月1日、「回答 河川流出モデル・基本高水の検証に関する学術的な評価」（甲B第147号証）を公表した。この検証作業は、平成22年11月5日の記者会見において、馬淵澄夫国土交通大臣（当時）が、平成17年度の「利根川水系河川整備基本方針」における基本高水の検証は「22,000トンありき」の検証であったと公表したことから始まったものである。
- 2 学術会議の「回答」では、利根川の基本高水のピーク流量は毎秒2万1100 $\text{m}^3$ とするものであったが、「回答」が導いた結論とその判断過程には、科学的検証というには様々の大きな問題が積み残されていた。
- 3 カスリーン台風洪水の八斗島地点における実績流量は、国交省の公式見解では毎秒1万7000 $\text{m}^3$ であるとされているが、学術会議はこの値については何らの検証も行わなかった。国土交通省の報告を鵜呑みにしたのである。そして流出計算上でも、また実績流量の点からも何も検証を行わなかった。
- 4 そして、基本高水のピーク流量の検証においては、実績流量に基づく検証結果のある毎秒1万 $\text{m}^3$ 以下の洪水から導かれたデータ（飽和雨量、K、pなど）を用いて、毎秒2万 $\text{m}^3$ を越すレベルの洪水の再現計算を行い、ピーク流量は毎秒2万1100 $\text{m}^3$ としたのであるが、こうした計算

技法は、世界的にも未確認の手法のものであった。

5 しかも、その計算技法は、中規模洪水で得られたパラメータを用いて大規模洪水の流出計算を行うと過大な値が出るとの致命的な欠陥を持つ計算技法なのである。そしてしかも、流出計算で採用した降雨の河道への流出率のデータは利根川上流域の森林土壌の貯留能力を反映せず、実績よりも流出が高く出るデータを用いて得た計算結果なのである。そのため、その計算流量（毎秒2万1100 m<sup>3</sup>）とカスリーン台風洪水との実績流量とは大きく乖離することとなり、学術会議自身その説明に窮しているという状況にある。

6 その上、このカスリーン台風時の実績流量とされる毎秒1万7000 m<sup>3</sup>は、昭和24年の「改修改定計画」の目標流量なのであるから、事実を直視すればさらに低減することは自明なのであり、そうなれば、益々乖離は増大し、計算精度は更に低下するに至る。

同会議の土木工学・建築学委員会 河川流出モデル・基本高水評価検討等分科会の小池俊雄委員長を法廷に招請し、以上の事実を確認する必要がある。

### 第3 尋問事項

追って提出する。

以 上